

甲南女子大学蔵本江戸中期書写『源氏物語』帚木の巻の本文について

——新注との異同箇所から——

竹 内 彩

甲南女子大学図書館が所蔵する、「江戸時代書写 源氏物語」(以下「該本」とする)は、かつて本学の非常勤講師を務めていらつした吉永孝雄先生(浄瑠璃・文楽研究者。元羽衣短期大学学長)より、本学図書館に寄贈されたものである。この該本については、以前発行した「甲南女子大学大学院論集 第十一号」では、須磨の巻(前半)・初音の巻、「甲南女子大学大学院論集 第十二号」では、帚木の巻・須磨の巻(後半)・篝火の巻について考察した論文を掲載した。今回は、前号に引き続き帚木の巻を取り上げ、その異同箇所について検討・考察していきたいと思う。

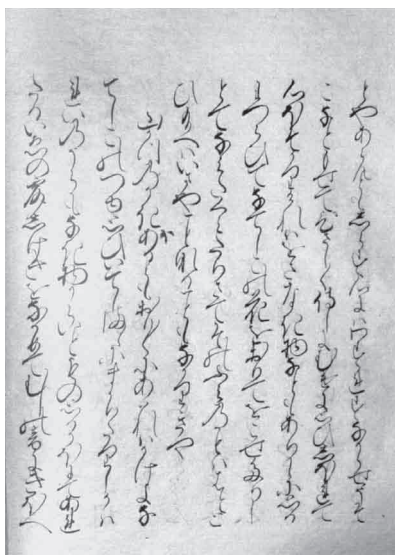
一. 甲南女子大学本の書誌

該本は、縦二四二糎、横一七六糎の四ツ半本。列帖装。表紙は、焦げ茶色の布貼りの紙で、その材質から、昭和になって付け替えられた後補表紙であると考えられる。表紙の中央には無地の題簽があるが、何も書かれていない。見返しは、手透き風の白い和紙。また、夕顔の巻について、前号に載せた夕霧の巻に続き、綴じ誤りが見つかった。該本夕顔の巻の一折目の九枚目・十枚目が、本来の順番とは逆に綴じられていた。該本墨付七丁、八丁、九丁、十丁が、それぞれ本来の八丁、七丁、十丁、九丁に相当する。この綴じ誤りは、夕霧の巻と同様、昭和になって合冊本にされた際のものと考えられる。さらに、常夏の巻において、本文が錯簡している部分が見つかった。この錯簡については、今後詳細に検討していきたいと思う。

二. 帚木の巻

該本の帚木の巻は、二折で、一折目は十四枚、二折り目は十二枚(それぞれ、二八丁、二四丁、全五二丁)。巻頭に三丁、巻末に二丁の遊紙がある。巻頭三丁目の遊紙中央に、墨流しの題簽があり、「帚木」と書かれている。題簽は、縦約六・二糎、横約三・二糎。墨付は四十八丁。朱点、朱筆はなし。また、補入が一ヶ所あり、墨付二十四丁裏の七行目に、山かつのかきある^ほともおりくにあはれはかけよな

というような補入がみられた。墨の濃淡が本文のものとは異なっている。(写真A参照)



写真A 帚木 墨付二十四丁裏

まず、該本を翻刻し、『新編日本古典文学全集』⁽¹⁾の本文と比較したところ、計一八一ヶ所の本文異同があった。その中から、本論では、

①墨付二十八丁表五行目「はなのあたりおこめきてかたりなす」

②墨付三十三丁裏四行目「わた殿より出てたるいつみにのそき見ゐてさけのむ」

について検討・考察していきたい。

また、該本がどのような性質を持っているのかを考察する過程において、帚木の巻で使用した新注を先に列挙しておく。(以下、「新注」とある場合はすべて次の四冊を指す。)

・『新編日本古典文学全集20 源氏物語①』(底本、大島本。以下「全集」「全集本」とする)

・『新日本古典文学大系19 源氏物語 一』(底本、明融本。以下、「新大系」「新大系本」とする)

・『日本古典文学大系14 源氏物語 一』(底本、宮内庁書陵部蔵三条西家本。以下、「旧大系」「旧大系本」とする)

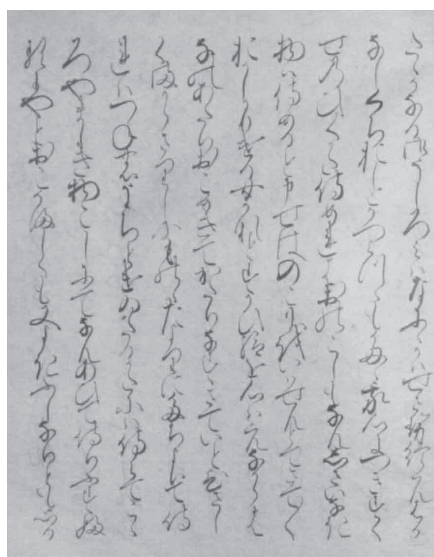
・『新潮日本古典集成(第十三回) 源氏物語二』(底本、明融本。以下、「集成」「集成本」とする)

①墨付二十八丁表(写真B)

た、かなる御うしろみはなに、かはせさせ給はむはかなしくおしとかつみつ、もた、我心につきくせのひくかた待めれはおのこしもなむしさいなき物は待めると申せはのこりをいはせむとてさて／＼おかしかりける女かなとすかひ給を心はえなからはなのあたりおこめきてかたりなすさていとひさし

くまからさりしにもの、たよりにたちよりて侍れはつねのうちとけゐたるかたには侍らてこ、ろやましき物こしにてなむあひて侍りふすふるにやとおこましくも又よきふしなりとも思ひ

(波線・太字筆者、以下同じ)



写真B 帚木 墨付二十八丁表

五月雨の降り続くある夜、宿直で宮中にいた光源氏のもとに頭中将が訪れ、女性の品評が始まる。さらに、女性経験の豊富な左馬頭と藤式部丞もこの場に加わり、女性談議に花が咲く。いわゆる「雨夜の品定め」である。その「雨夜の品定め」の中で、藤式部丞は、自分がまだ文章の生であったときに出会った「かしこき女」の話をする。ここは、その「かしこき女」の話が一段落ついて、頭中将が藤式部丞に話の続きをさせようと彼をおだてる場面である。

該本波線部に該当する新注の本文は、次の通りである。該当の本文に、訳や注釈がある場合は、それぞれ本文の左側に記載する。

集成本 (明融本)	新大系本 (大島本)	旧大系本 (書陵部蔵三条西家本)	全集本 (明融本)	該本
<p>(傍注) おだてなさるのを 分つてはいながら うこめかせて</p> <p>すかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりおこづきて語りなす。</p>	<p>(脚注) 鼻の辺りをおどけて見せてあえて語る、の意か。河内本など「をこめきて」。</p> <p>すかい給ふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。</p>	<p>(頭注) すかされるとは承知しながら、鼻の辺を調子に乗つてはずまして、敢えて話す。「おこづく」は「誇りに調子づく」などの意。</p> <p>すかい給ふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。</p>	<p>(訳) おだてあげておられる、それを先刻承知しながら、鼻のあたりをおどけて見せながら話を続ける。</p> <p>(頭注) 「鳥辭つく」で、おろかにみえる。ここは演技である。</p> <p>すかいたまふを、心は得ながら、鼻のわたりをこづきて語りなす。</p>	<p>(訳) おだてなさるのを理解しつつ鼻のあたりをおどけたようにして話をする。</p> <p>すかひ給を心はえなからはなのあたりおこめきてかたりなす</p>

該本墨付二十八丁表五行目「おこめきて」は、新注ではすべて、「をこつきて」という本文になっている。⁽²⁾ 該本「をこめきて」が、他本ではどのような本文を持つのかを、『源氏物語大成』・『源氏物語別本集成』・『源氏物語別本集成続』によって調べたところ、青表紙本系統に属する池田本・松浦本・肖柏本などでは、「をこづきて」、河内本系統に属する尾州家本・高松宮家本、別本系統に属する陽明文庫本・

国冬本などでは、「をこめきて」という本文を持つようである。つまり、おおむね、青表紙本系統では「をこづきて」、河内・別本系統では「をこめきて」という本文を持つと言える。

次に、「をこめく」ないし、「をこづく」の意味についてである。『角川古語大辭典』⁽³⁾によると、これらは、名詞「をこ」に、接尾語の「めく」または「つく」がついた語であるようだ。また、「をこ」「をこめく」「をこづく」という単語の意味について、次のように記載されている。

◎をこ【癡〔烏澁・尾籠〕名・形動ナリ ①愚かではかかげているさま。たわ
けているさま。愚か。ばか。②ふとどきなさま。けしからぬさま。

◎をこめ・く【癡めく】動力四「めく」は接尾語。愚かなさまをする。ふざける。

◎をこづ・く【癡づく】 動カ四 「おこづく」と表記する場合も多いが、「鳴呼つきて嘲で（今昔・一〇・三六）」の例にも見られるように「をこ」に接尾語「づく」が付いた語で、傍から見れば「をこ」と感じられるほど、常軌を逸した行為をいう語であらう。①外貌や態度がばつとしない。風采があがらない。②調子づいて、人を刺激する言動をする。③激しく上下動する。がくがくする。④傷などがうずく。ずきずきと痛む。

このように、「をこ」は、「愚かではかけているさま」「たわけているさま」や「ふとどきなさま」「けしからぬさま」を表す名詞。「をこめく」は、「めく」は接尾語で、「愚かなさまをする」「ふざける」といった意味をもつ動詞。「をこづく」は『をこ』に接尾語『づく』が付いた語で、傍から見れば『をこ』と感じられるほど、常軌を逸した行為をいう語であろう。」との記載があり、「外貌や態度がばつとしない」「調子づいて、人を刺激する言動をする」などといった意味を持つ動詞であることがわかる。ここで、「をこめく」の用例について見ていきたい。『新編日本古典文学全集』『角

川古語大辭典』などを見ると、該当箇所以外に三例の用例が見出せる。これはすべて『源氏物語』における用例である。⁴⁾ それぞれの該当箇所について、新注を見たところ、新注はいずれも「をこめく」となっていたため、代表として全集本の本文を挙げた。また、その本文の左側にそれぞれの新注の訳ないし注釈を載せた。

(一) 初音の巻

さるは、高巾子の世離れたるさま、寿詞の乱りがはしき、をこめきたる言もことごとしくとりなしたる、なかなか何ばかりのおもしろかるべき拍子も聞こえぬものを。

〔全集本〕(訳) もっとも、高巾子の世間ばなれのした有様、祝い言の乱雑なるさま、道化じみた言葉をさもわけありげに言いたてたのなど、どうもこれといっておもしろく聞かれるような曲節でもなかったのだが……。

〔頭注〕「寿詞」は、豊年を祈る言葉で生殖祈願に通じ、「乱りがはしき、をこめきたる言」が入る。それが神に祈る性格上仰々しいものとなったか、との説がある。

〔旧大系本〕(頭注) 源氏も御前に、人々が述べる賀詞(寿詞)の騒々しい、かつ馬鹿馬鹿しい有様の事も頓着せず、踏歌の人々は大袈裟に勿体ぶって居たのは、なまなか、事々しくするが故に騒々しくて、却って、何程の、面白くあるはずの拍子も、聞かれぬのに(事々しくするよ)。

〔新大系本〕(脚注) 祝言のなかには、豊年予祝の言葉が生殖祈願に通ずることもあるので、色恋の「乱りがはしき」内容だったり、滑稽な内容だったりするらしい。

〔集成本〕(傍注) 滑稽なことも
(頭注) 男踏歌の時、奉る祝いの言葉。豊年多産を祈って滑稽なことを言ったらしい。

(二) 常夏の巻

「何か、そは。ことごとしくおもひたまひてまじらひはべらばこそ、ところせからめ、大御大壺とりにも仕うまつりなむ」と聞えたまへば、え念じたまへで、うち笑ひたまひて、「似つかはしからぬ役なり。かくたまさかに逢へる親の孝せむの心あらば、このもののたまふ声を、すこしのどめて聞かせたまへ。さらば命も延びなむかし」と、をこめいたまへる大臣にて、ほほ笑みてのたまふ。「舌の本性にこそはべらめ。(後略)」

〔全集本〕(訳) 「なんのそんなことは。ご大層に考えてお勤めをいたしますのなら、なるほど窮屈でしょうけれど……。大御大壺取りの役でもお仕えいたしましょう」と申し上げなざるので、大臣は辛抱がおできにならずお笑い出しになり、「それは不相応な役目でしょうな。こうしてたまにやと会えた親に孝行しようという気持ちがあるのなら、そなたの何かおっしゃる声を、もう少しゆっくりきかせてください。そうしたら、わたしの寿命ものびるにちがいないな」と、おどけたところのある大臣なので、苦笑いしながらおっしゃる。

〔頭注〕 内大臣は、近江の君をからかっておもしろがる。

〔旧大系本〕(頭注) 鳴謝(ふざけた性質)らしくおありなざる大臣なので。

〔新大系本〕(脚注) 「ことおかしく物をの給ふ心也」(湖月抄)。

〔集成本〕(傍注) 道化たところがありの

(三) 総角の巻

こはいかにもてなしたまふぞと、夢のやうにあさましきに、後の世の例に言ひ出づる人もあるならば、昔物語などに、ことさらをこめきて作り出でたる物の譬にこそはべりぬべかめれ。

〔全集本〕(訳) いったいどうなさるおつもりか、とあまりのことに夢のよ

うに存ぜられますが、もし後々に世間話の種に持ち出す人でもありましたら、ちょうど昔物語などにとりわけ愚かしく作りあげられた譬話と同じことになりましょう。

〔頭注〕男にだまされて、ひどいめにあった愚かしい女の話とでもいった類型が、昔物語には多かったのであろう。

〔旧大系本〕〔頭注〕滑稽めいた愚か者風に作り出している、何かの例に、いかにもまあ。

〔新大系本〕〔脚注〕後々に（私たちを）世間話の種に持ち出す人がいたなら、昔物語に愚かしく作りあげた（笑われ者の）話と同じことになろう。

〔集成本〕〔頭注〕あとあと、（こんな目に会った私たちのことを）世間で話の種に持ち出す人があれば、昔物語などに、わざと馬鹿げた笑われ者として描いている、その見本になりそうに思われます。

初めに、（一）の初音の巻の用例についてである。六条院が落成して初となる正月を迎え、その数日後に男踏歌の日がやってきた。男踏歌の一行は、朱雀院を経て、六条院へ訪れる。これは、その男踏歌の一行を光源氏がもてなし、女性たちが見物している場面である。「寿詞の乱りがはしき、をこめきたる言もことごとしくとりなしたる」とある。まず、「寿詞」というのは、祝いの言葉のことで、その寿詞が「乱りがはし」く、「をこめ」いていると解釈できる。新注の注釈によると、踏歌の際に、「豊年多産を祈って滑稽なことを言ったらし」く、その言葉が「生殖祈願に通ずることもあるので、色恋の「乱りがはしき」内容だったり、滑稽な内容だったりする」ようだ。この「をこめきたる言」というのは、「滑稽な内容の言」、つまり、笑いの対象となるようなおもしろい言葉であると判断できる。初音の巻の「をこめく」は、注釈にもあるように、滑稽な状態や、おもしろおかしくおどけている状態を表す語であると考えられる。

次に、（二）常夏の巻の用例である。内大臣（かつての頭中将）は、引き取った近江の君を弘徽殿女御（内大臣の娘）に託そうと、彼女のところに訪れて話をする。

これは、その際に立ち寄った近江の君の所で、内大臣と近江の君が問答をする場面である。「〔前略〕さらば命も延びなむかし」と、をこめいたまへる大臣にて、ほほ笑みてのたまふ」とある。内大臣が近江の君の言ったことに対し「をこめいたまへ」ているのである。新注の注釈を見ると、「内大臣は、近江の君をからかっておもしろが」っており、道化たところがある人物と捉えられる。このことから、常夏の巻の「をこめく」は、「おどける」「ふざける」といった意味であることが分かる。この二例を見ると、「をこめく」は、「おどける」といった意味の語であると言えよう。

最後に、（三）総角の巻の用例についてである。八の宮の一周忌を迎え、薫は大君に想いを打ち明けるが、大君は独身を貫くことを決めているため応じない。むしろ、彼女は妹の中の君を薫に思っている。それを知った薫は、匂宮を中の君の元へと導き、その上で、大君に求婚する。これは、そのような予想外の状況に大君が嘆く場面である。「後の世の例に言ひ出づる人もあるならば、昔物語などに、ことさらをこめきて作り出でたる物の譬にこそはべりぬべかめれ」とある。つまり、注釈にあるように、「昔物語などに、ことさらをこめきて作り出でたる物の譬」というのは、「昔物語に愚かしく作りあげた（笑われ者の）話」と言うことになり、「をこめく」に、「愚かしい」「愚か者風」といった意味があることが分かる。

以上のことから、「をこめく」は、「おどけた様子」や「愚かしい様子」を表す語であると言え、帯木の巻の「をこめく」も同様な意味を持つと考えられる。

では、「をこづく」はどのような意味を持つのだろうか。「をこづく」の用例を見ると、該当箇所以外には『今昔物語集』に二例、『十訓抄』に四例、『古今著聞集』に一例、また『曾我虎が磨』や『義経千本桜』などの人形浄瑠璃・歌舞伎の演目にまで見られる語のようである。しかしながら、『源氏物語』や同時代の作品の中には、「をこづく」という語は見出せない。『源氏物語』以降の最古の用例でも『今昔物語集』の用例ということになり、少なくとも百年ほどの隔たりがある。鎌倉時代における用例を見ても、全て説話集における用例で、仮名文学においてはあまり見られない語と言えらるだろう。「をこづく」の用例が『源氏物語』においても、先の時代および同時代の作品にも見られないため、後代での用例になってしまいが、「をこづく」がどのような意味として使用されているのか、用例を見て検討したいと思う。

I 今昔、安房守文屋ノ清忠ト云フ者有キ。外記ノ旁ニテ、安房ノ守ニ成タル也。其レガ外記ニテ有シ間ダ、面ハシタリ顔ニテ気憎氣ニテ、長ク去張テナム有シ。出羽ノ守大江ノ時棟ト云フ者有キ。其レモ同時ニ外記也シ時、腰屈テ嗚呼付テナム有ル。〔今昔物語集〕

II 源中納言国信家の歌合を、俊頼の判じたるをば、若狭阿闍梨隆源、左衛門佐基俊など、おのおのをこづき、やうやうのことども、書きつけたりけるにや。〔十訓抄〕

III かたがた、いかでかをこづくべき。かへすがへす不当のことなり。〔十訓抄〕

IV 佐実といふ人、さかしだちたる本性にて、「いなや、武士も女のかたには惚るものなり。おのれは盗まむとだに思はば、仲正、いかに守るとも、それにさはらじ」といふより、何をあたとか思ひけむ、仲正がことをあざけり、をこづくやうにいひければ、かたへは詞少なにてやみにけり。〔十訓抄〕

V かくいふは敦正が鼻の赤かりければ、をこづくなりけり。〔十訓抄〕

VI 接取の光明をかぶらむ行人をは、神明も争でか罰し給ふべき」とて、おこづきあざむきけり。〔沙石集〕

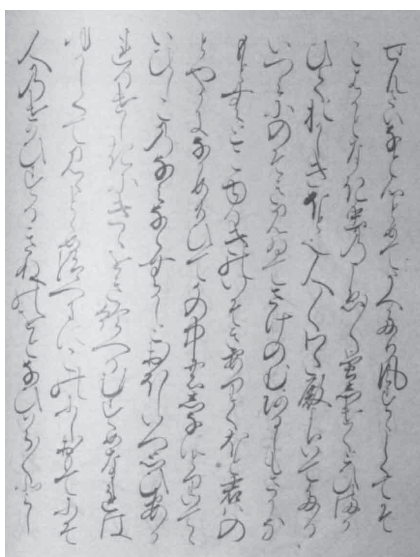
以上、平安時代末期から鎌倉時代までの用例を六例挙げた。⁽⁵⁾ Iを見ると、「間の抜けた様子」と言う意味、IIやIII、IVを見ると、「悪口を言う」「馬鹿にする」「非難する」といった意味であることが分かる。

ここで、新注「をこづく」を見てみよう。先ほど用例を見たように、「をこづく」は「間の抜けた様子」「馬鹿にする」「非難する」といった意味を持つ語であると考えられるが、新注では、「おどけて見せながら（全集）」「調子に乗ってはずまして（旧大系）」「おどけて見せて（新大系）」「うごめかせて（集成）」といった意味が当てられている。特に全集本や新大系本では、「をこめく」の意味に近い「おどけて見せる」といったような訳が当てられており、「をこづく」の用例における意味とは少し異なる意味が当てられている。さらに、先ほども述べたが、「をこづく」は、『源氏物語』にも『源氏物語』と同時代の作品にも見出だせない語である。『源氏物語』以降では、『今昔物語集』の用例にまで時代が下る。このことを考えると、はたして、「をこづく」という語は、『源氏物語』が書かれたであろう時代にあつた語と言えるのだろうか。以上のことを踏まえ、と、該本「をこめく」は、より古い形を保った本文であると言えるかもしれない。

という語は、『源氏物語』が書かれたであろう時代にあつた語と言えるのだろうか。以上のことを踏まえ、と、該本「をこめく」は、より古い形を保った本文であると言えるかもしれない。

② 墨付三十三丁裏（写真C）

せむさいなと心とめてうへたり風す、しくてそこはかとなき虫のこゑく、螢しけくとひまかひておかしきほと也人くわた殿よりいてたるいつみにのそき見るてさけのむあるしもさかなもとむとこゆるきのいそきありくほと君はのとやかになかめ給ひてかの中のしなにとりいて、いひしこのなみならむかしとおほしいつ思ひあかれるけしきにき、をき給へるむすめなればゆかしくてみ、と、め給へるにこのにしおもてにぞ人のけはひするきぬのをとなひはらくとし



写真C 帯木 墨付三十三丁裏

光源氏は、「雨夜の品定め」があつた翌日、左大臣邸に退出する。しかし、夜になると、光源氏は方違えに赴き、従者の提案によって、紀伊守の屋敷へ向うことに

なる。ここは、そのような光源氏一行が紀伊守邸に訪れた場面である。

該本波線部に該当する新注の本文は、次の通りである。該当の本文に、訳や注釈がある場合は、それぞれ本文の左側に記載する。

該本	全集本 (明融本)	旧大系本 (書陵部蔵三条西家本)	新大系本 (大島本)	集成本 (明融本)
人くわた殿よりいてたるいつみにのそき見ゐてさけのむ (訳) 人々は渡殿の下から湧き出ている泉に臨んで、座つて見ながら酒を飲む。	人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて酒のむ。 (訳) 共人たちは、渡殿の下から流れ出ている湧き水を見下ろす所に席を占めて、酒を飲む。	人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて、酒のむ。 (頭注) 渡り廊下の下を通って流れて来る、泉の水に臨み居て。「のぞく」は「臨む」で、見下ろすこと。	人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて酒のむ。	人々、渡殿より出でたる泉にのぞきゐて酒のむ。 (傍注) 供人たち (頭注) 渡殿の下から湧き出ている泉を見下ろす場所に坐つて。

該本墨付三十三丁裏四行目「のそき見ゐてさけのむ」は、新注においては、「のぞきゐて酒のむ」という本文になっている。他本では、ほとんどの本において「ゐて」となっており、それ以外には、陽明文庫本が「のぞきてゐて」という本文、阿

里莫本が「のぞみゐて」という本文を持っている。該本に記す「のぞき見ゐて」という本文を持つものはなく、これは、該本の独自本文と考えられる。

次に、新注と該本、それぞれの本文の解釈についてである。まず、「泉にのぞき」についてであるが、『角川古語大辞典』において「のぞく」という単語を調べると、

◎のぞく【臨・覗】動カ四①「…にのぞく」の形で用いて、何かを見渡せるような位置に占めることをいう。臨む。②物や場所などを部分的に、あるいは短時間見る。特にすきまなどから見る。また、見てはならぬものを、こっそり見る。③囲碁用語。

と記載されている。「のぞく」は、「泉にのぞき」となっていることから、①の意味が当てはまり、「泉に臨んで」という訳になる。そして、「ゐて」は、「立ったり動いていた」していた者が、ある所に座る。腰をおろす。⑦」という意味があり、「泉にのぞきゐて」は、「泉に臨んで座つて」という解釈になろう。

次に、該本「いつみにのそき見ゐて」としての解釈を考えてみたい。まず、この本文のような構成になっているかという点、名詞「いつみ」に位置を表す格助詞「に」がつき、動詞「のそく」が続く。ここで一旦文が切れ、さらに、動詞「見る」に動詞「ゐる」がつき、接続助詞「て」が続く形になっている。「ゐる」という語は、補助動詞として使用する場合もあり、その場合は、「動詞の連用形に付き、上接動詞の表すことが成立したり始まつたりして、そのままじつとする意、あるいは、じつとしている意を表す」ようである。^⑧ここでは、「ゐる」は補助動詞として使用されていると考えられ、「見ゐて」は「見てじつとしている」という意味になると考えられる。

それらを踏まえ、「人くわた殿よりいてたるいつみにのそき見ゐてさけのむ」を訳すると、「人々は渡殿の下から湧き出ている泉に臨んで、座つて見ながら酒を飲む」となるだろう。「人く」は、ただ単に「ゐる」ではなく、「見」て「ゐる」のである。

では、「見ゐて」のように「見」が入ることによって、どのようなことが言える

のだろうか。「ある」の場合であると、「臨んで座って酒を飲む」つまり、人々が「酒を飲む」のに焦点が当てられているのに対し、「見ある」になると、「臨んで座って、見ながら酒を飲む」つまり、「見ながら」に焦点が当てられていることになると思われる。

先ほども述べたとおり、ここは、紀伊守の邸へ訪れた場面である。その紀伊守邸の庭の様子が次のように語られている。

「にはかに」とわぶれど、人も聞き入れず。寝殿の東面払ひあけさせて、かりそめの御しつらひしたり。水の心ばへなど、さる方にをかしくしなしたり。田舎家だつ柴垣して、前栽など心とめて植ゑたり。風涼しくて、そこはかとなき虫の声々聞こえ、蛩しげく飛びまがひてをかしきほどなり。人々、渡殿より出でたる泉にのぞきみて酒のむ。あるじも、肴求むと、こゆるぎのいそぎ歩くほど、のどやかにながめたまひて、かの中の品にとり出でて言ひし、この並ならむかしと思し出づ。(『新編日本古典文学全集』より)

『源氏物語』において、作者は光源氏が見ているものを描いていると言われているが、この場面も、傍線部にあるように「をかしくしなしたり」や「心とめて植ゑたり」など、光源氏が紀伊守邸の庭を見てどのように感じたのかということが語られている。光源氏の目を通して庭の情景が描かれるのである。さらに、光源氏は「人々」わた殿よりいてたるいつみにのぞき見みてさけのむ」という、彼の従者たちが、渡殿の下から湧き出ている泉に臨んで、座って見ながら酒を飲んでいる様子を見ているのである。供人も光源氏を感じた「をかしくしなした」る紀伊守邸の庭の風情を味わっていると捉えられる。該本に記すように「見」が入ることによって、光源氏はもちろん、彼の従者たちもその風情ある光景を楽しんでいるということを含んだ本文であると言えるだろう。

ここまで、他本との本文異同である「をこめきて」「見めて」について、おのおのその語が持つ意味について考察してきた。「をこめきて」という本文については、

「をこめく」の用例と、後代のものではあるが「をこづく」の用例を比較すると、「をこめく」の方が「をこづく」よりも「をこ」の程度が軽い語であるように考えられる。また、「をこづく」は、『源氏物語』での用例を除くと、後代の用例しか見出せない点。さらに、和漢混交文で書かれた文学作品では「をこづく」という語は見られるが、仮名文学の作品には見られない語であると言え点。以上のことから、もしかすると、「をこづく」は『源氏物語』の成立した時代には存在していない語である可能性もあるだろう。該本にも記す「おこめきて」は、新注などの「をこづきて」より古い形を保っていると考えられることもできるのではないだろうか。

また、「見めて」という本文については、「見」が入ることによって、「見ながら」という共人の視線が強調された本文になる。光源氏はもちろん、彼の従者たちも、紀伊守邸の趣向を凝らした庭の情景を楽しんでいるといったニュアンスを持つ本文であるとも考えられる。

このように、「をこめきて」では、該本の本文が古い形を残しているかもしれない点について、「見めて」では、該本による独自の読みという点について考察した。今回検討した「をこめきて」「見めて」を踏まえ、他の本文異同について、今後も、考究を進めていきたい。

【注】

- (1) 阿部秋生 秋山虔 今井源衛 鈴木日出男『新編日本古典文学全集 源氏物語(一)』小学館一九九四年・一九九八年
- (2) 「をこめきて」の表記についてであるが、該本「おこめきて」は、ア行の「お」であるのに対し、新注では多くがワ行の「を」で表記している。これらの表記について、『源氏物語』の諸本においては、どちらの表記も混在している。そのため、表記の差はここでは問題にしないことを述べておく。また、新注における「をこづく」の「つ」の清濁については、白石良夫氏の「小学館全集に濁点がないのは、「をこ」+「づく」の連濁する前の形だとの判断であろう。」(『オコヅク考、オゴメク考…帯木巻の異文の解釈』二〇〇六年)との指摘に従い、この表記の差も問題としない。これらの表記について、本論では、引用部分以外において、「をこめきて」は歴史的仮名遣いの「を」に、「つ」の清濁については、「をこづく」に統一する。

- (3)『徒然草』の三七段に「人の言ひしまに、鼻のほどおこめきて言ふは、その人の虚言にはあらず」といった一文がある。この「鼻のほどおこめきて」は、河内・別本系統帯木の巻「鼻のあたりをこめきて」という表現を踏まえたものであることは明らかである。この『徒然草』の「おこめきて」については、白石良夫氏によって、「この「おこめく」が近世初期にあらわれた、新しい古典語であることは、贅言を要すまい。」（『オゴメク幻想』「オコツク考、オゴメク考」補訂を兼ねて「二〇〇七年」とされ、『徒然草』「鼻のほどおこめきて」は、「おこめきて」ではなく「おこめきて」であると述べている。つまり、『徒然草』の「おこめきて」も元々は「をこめきて」であるのだが、先述した通り、帯木の巻を踏まえた表現であるため、ここに挙げるまでに留めておき、本論では「をこめきて」の用例は、『源氏物語』の三例とし、検討していきたい。
- (4)『角川古語大辞典 第一巻／第五巻』角川書店 一九八二年～一九九九年
- (5)すべて『新編日本古典文学全集』による。『古今著聞集』の用例について、『日本古典文学大系84 古今著聞集』の補注では、「五七五・五七七・五七八の三段は、いずれも十訓抄巻四・三段・巻三・九段・巻四・七段とほぼ同文に近い。また、これらは巻末にあつて、説話の配列も年代を乱しているの、抄入であると認められる。」と指摘している。「ほぼ同文」とあるように全くの同文ではないが、「をこづく」という語句に関して、特に異同がなく、解釈に違いが生じるといったこともなかったため、今回は『古今著聞集』の用例の記載を省略した。
- (6)池田龜鑑『源氏物語大成』（中央公論社 一九八四年）、『源氏物語別本集成』（桜楓社 一九八九年）と『源氏物語別本集成続』（桜楓社 二〇〇五年）による。
- (7)4に同じ
- (8)『角川古語大辞典』に、「ある【居】■補動ワ上二 動詞の連用形に付き、上接動詞の表すことが成立したり始まつたりして、そのままじつとする意、あるいは、じつとしている意を表す。前者の場合も、その多くは「…あたり」の形で結局は、じつとしている意を表すものである。のちには「て」を介しても用いた。」との記載がある。